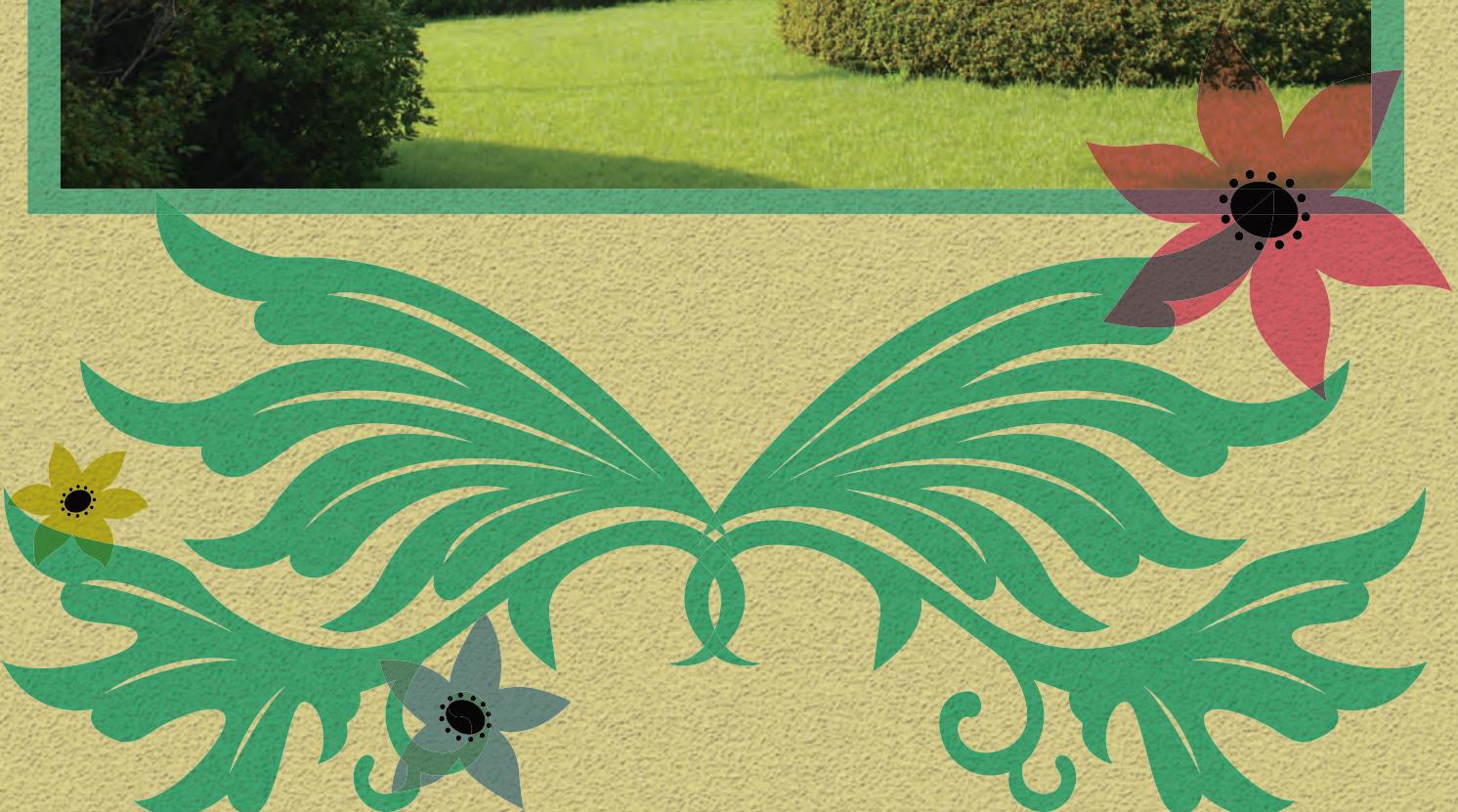


一橋大学 国立キャンパス

# 緑の30景



ひとつばしー丁目

1

## 正門の銀杏並木



みごろ

春 夏  
秋

植物

イチョウ

国立キャンパスの正門を入るとイチョウが並木になっています。樹高約15m、左右に10本づつ計20本のイチョウが整列して、来訪者を図書館前の中央庭園に導きます。春はいち早く緑の葉をつけ、秋には見事に黄葉します。

イチョウは中国から伝來したことですが、日本人によく好まれている樹木で、東京の神宮外苑、大阪の御堂筋などの並木は特に有名です。成長すると「イチョウの乳」と云って枝や幹から気根のような垂れ下がりが生じることがあります。その為か、子育て地蔵などが、木の下に安置される例があります。見上げて搜して見るのも面白いでしょう。このイチョウ並木は明治38年卒のパイオニア会の記念植樹です。

針広防音林

## 西校舎中央防音林

2



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

アカマツ  
ヒマラヤスギ  
スダジイ  
クスノキ  
エノキ  
ヒイラギモクセイ  
モチノキ

西校舎の正門の南側、消防器具置場から道路境界までの一帯は高木の針葉樹と常緑広葉樹が混生して、防音、遮蔽の役割を果たしています。針葉樹はアカマツとヒマラヤスギで、広葉樹が5本のスダジイとクスノキですが、落葉樹のエノキの大木もあります。また、道路との境には低木のヒイラギモクセイが植栽されています。

常緑広葉樹のスダジイはブナ科に属し、ドングリは長楕円形で煎って食べられます。古代にはクリの実などと並んで食用にされていたようです。葉裏は灰褐色ですが、一般には金色と表現されます。スダジイの4本は大正4年卒OB四日会の寄贈樹木です。

消防器具置場横のモチノキは、泰山会の記念植樹です。

ヒマラヤ通り

## 本部棟横ヒマラヤ杉

みごろ



植物

ヒマラヤスギ



法人本部棟の西側と本館の間に、ヒマラヤスギの巨木が8本植栽されています。名前の通りヒマラヤ原産ですが、分類上はスギ科ではなくマツ科です。マツボックリはバラの花に似た形状で、ドライフラワーに使われています。幹は直立し、みごとな円錐形の樹形になります。レバノンスギもこの仲間です。材は香りがあり自生地では建築用に使われていますが、日本では利用されていないようです。

この8本のヒマラヤスギに対峙する形で、本館横にもヒマラヤスギがありますが、こちらは、明治24年辛卯会の記念植樹です。

紅葉の郷

## 職員集会所前の紅葉



みごろ



植物

イロハモミジ  
ドウダンツツジ  
イチョウ

中央庭園の東端から、ヒマラヤ通りを南側にまっすぐ進むと、奥に木造の職員集会所があります。本館裏から職員集会所にいたる路の左右は、イロハモミジとドウダンツツジを中心とした落ち着いた雰囲気のある一帯です。特に秋の紅葉にはすばらしいものがあります。

一般に秋のモミジには、紅葉するものと黄葉するものとがあり、例えばカエデの中で葉に鋸歯のあるイロハカエデ、オオモミジなどは赤くなり、鋸歯の無いイタヤカエデ、エンコウカエデは黄色になります。この場所では4株のドウダンツツジと9本のイロハカエデが赤く色付きます。ただし、ここで黄色を演出するのは、カエデではなくイチョウです。

庭園無石園

職員集会所庭園



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

イロハカエデ  
ツバキ モッコク  
イヌツゲ サツキ  
ササ アオキ  
アツバノキミガヨラン  
ヒイラギ ヒノキ  
キャラボク  
サワラ スダジイ  
アカマツ コナラ



椎の森

西プラザ手前の椎の木



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

スダジイ



図書館前の池から西プラザに抜ける路の左側に存在感のある緑の一角があります。

この木はスダジイです。いわゆるシイの木で、東北地方南部より南に分布し、日本の照葉樹林を代表する樹木です。ブナ科の植物ですから、ドングリができます。ドングリの殻斗（かくと）は、ドングリを包んでいます（注）。同じ形態のドングリには、ブナ、イヌブナ、クリ、ツブラジイなどがあります。スダジイ、ブナ、クリのドングリは食べられます。スダジイは、炒ると、ビールのつまみとして、なかなかとのことです。

※No.10のドングリの説明を参照のこと。

## 花水木の園

# 西プラザ北側の花水木



みごろ

春

植物

アメリカハナミズキ  
ゴヨウマツ

## 憩いの園

# 西プラザ前の西洋庭園



みごろ

みごろ

春

植物

オオムラサキツツジ  
ケヤキ  
アベリア  
コブシ  
レンギョウ  
シラウメ  
ゲッケイジュ

西プラザ北側にアメリカハナミズキ3本とゴヨウマツが1本植栽されています。1912年、当時の東京市長・尾崎行雄は日露戦争に際して日本に好意的であった米国への謝意としてワシントンD.C.へ桜(ソメイヨシノ)を贈りました。その返礼として米国から贈られた木がハナミズキです。花期は4月下旬～5月上旬、白や薄いピンクの花をつけます。この園には白とピンクの木が並立しています。園の西側にもハナミズキが、もう1本ありますが、これは石ゼミの記念植樹です。

可憐なハナミズキの間に、市原ゼミ記念植樹のゴヨウマツがあります。葉の元(短枝)から葉が5本出ていますから五葉松です。アカマツは2本ですから二葉松です。

西プラザの玄関前は西洋庭園です。庭園の方式は平面幾何学式で、館を起点として南北に軸線が通り、東西で左右対称になります。また、北側と南側に、異なった特徴があります。北側は玉作りのオオムラサキツツジに囲まれたテーブルが配置され、談笑スペースがあります。南側は、中心の台座にケヤキが植栽され、東西対称に小形の4本のコブシが囲んでいます。南側の植栽樹木は、タマイヅキ、アベリア、レンギョウなどです。このデザインが評価され、国土交通大臣の「緑のデザイン賞」を受賞しました。

この庭園の樹木は、3月ごろのコブシからレンギョウ、オオムラサキツツジと、春を中心に賑やかになります。秋まで咲くのはアベリアです。

この庭園の北側、シラウメの隣には、よく競技の勝利者に贈られるゲッケイジュが植栽されています。小泉明、高橋朝次郎、加藤弥平衛三氏を記念したものです。

東西の巨木たち

## 学食前の巨樹群



写真は、創立  
周年、國立  
移植八  
年を記念して植樹会が  
寄贈したケヤキ。二〇〇二年一月植樹

みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

ケヤキ  
クスノキ  
アメリカスズカケノキ  
ユリノキ

西プラザ西側の広場は数本の巨木が憩いのスペースを作っています。この中でケヤキとクスノキは、古来より日本人に親しまれている樹木です。ケヤキは関東地方に大木が多く、その理由は、関東ローム層に、2mにも達するケヤキの根を許容する厚みがあるからといわれています。写真のケヤキは、前にあった大ケヤキが倒れたため新たに植えたのですが、円形の根周りの囲いは直径10m近い大きさです。クスノキは「クスリノキ」が訛ったという説がありますが、木全体に芳香があり、樟脑や、防虫剤、医薬品、フィルムなどの原料になります。古代の丸木船の材料であり、安芸の宮島の鳥居もクスノキで作られています。

一方、アメリカスズカケノキとユリノキは明治時代に日本に輸入されました。スズカケノキの名は実が鈴のように枝からぶら下がることに由来します。また、ユリノキは花の形をユリの花に見立てたものですが、チューリップにも似ているため、チューリップノキとも呼ばれます。

ドングリの森

## 4本の白樺の巨木

10



陸上競技場の東側、椿の防音壁の北側を抑えてシラカシの巨木が4本屹立します。シラカシは、関東地方に多く、移植にも刈込にも耐え、成長も早いので屋敷林や公園などにも植えられています。その名前は材が白いと葉裏が白っぽいことによります。ブナ科で、ドングリを作ります。

一般にドングリは、その殻斗(かくと=ざぶとん or おさら)の形態で、①同心円状、②ウロコ状、③モジャモジャでひげ状、④実を包む包状の4つに分けられます。

シラカシの殻斗は、①の同心円状です。この形態は、アラカシ、アカガシ、シラカシなど常緑広葉樹の仲間に広く見られます。この仲間を分類学上はブナ科コナラ亜科コナラ属アカガシ亜属といいます。

みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

シラカシ

## 椿の回廊

11

## 寒椿の回廊



みごろ

秋 冬

植物

カンツバキ

防音林の主役は通常、常緑の高木ですが、ドングリの森に続く陸上競技場東側は、低木のカンツバキが主役です。この部分のキャンパスの外側は狭い道路を挟んで低層の住宅街であり、ここではキャンパス内の騒音が住宅街へ洩れることを防ぐを主な目的にしています。

カンツバキの間の高木はサクラとケヤキが多く冬は葉を落としますが、南北100m程に連なるカンツバキが初冬に赤い花を多量に咲かせ、存在感を示します。木の根元には、桜吹雪ならぬ椿吹雪の赤い花びらがしきつめられます。

ヤブツバキ系は、散る時に花ごと落花しますが、カンツバキはザザンカの園芸品種で、花びらが散って落花します。開花時には、メジロが蜜を求めてやってきます。

## 松桜の絆

## 松と桜の絡み合い

12



みごろ

春

植物  
マツ  
サクラ

日本人の好きな樹木であるマツとサクラが、陸上競技場のフィールドの中で絡み合うようにして立っています。

マツは常磐木としてめでたいものと考えられ、神の降臨する神聖な木とされています。一方、日本人には花といえば桜をさすという文化があります。もともとは西行の「願わくは 花の下にて 春死なん その如月の 望月のころ」という和歌がその起源とされています。この桜の咲くころ、商業の神ヘルメスも松の木に降臨して花を楽しんでいるかもしれません。それにも、どうしてこのような形態になったのか不思議です。



憶良の郷

# 13 ススキのゾーン秋の七草



みごろ

夏

秋

植物

- オミナエシ(女郎花)
- ススキ(尾花)
- キキョウ(桔梗)
- ナデシコ(撫子)
- フジバカマ(藤袴)
- ハギ(萩)

ウゲイスの営巣地

# ススキのゾーンをつなぐ小路 14



みごろ

春

秋

植物  
ミズキ

第一ススキのゾーンと第二ススキのゾーンを結ぶ小路は、キャンパスで一番南に位置し、クロスカントリーの練習路になっています。近年、この地区の樹木が伐採され、かなり日当たりがよくなっています。そのためこの地域には、日当たりを好むパイオニアプラントといわれる樹木など興味深い植物が生えてきています。

その中で一番目立つのがミズキで、40本ほどになります。早春、葉の出る前に枝を折ると水がしたたります。4～5月に枝を大きく広げて、葉の上に、白い小花を房状に咲かせ、見応えのある景色になります。秋には赤い実がなり、ヒヨドリなどの鳥を呼びます。葉は葉脈が深く美しく、材はコケシなどに利用されます。

哲学の道



## 武藏野の雑木林



みごろ



植物

クヌギ  
カタクリ

岸田ロードからひょうたん池にかけては、柔らかな光と周辺の静けさとがあいまって、散策にも、思索に耽るにも絶好の一帯です。この雑木林の中の小路は、その昔大学で哲学の教鞭をとられた太田可夫教授がよく歩いた道であると言われています。

ここにはクヌギが生えています。クヌギはブナ科コナラ亜属で、殻斗がモジャモジャのヒゲ状をしたドングリをつけます。コナラの同心円状の殻斗と比べてみましょう。

また、近年この一角にOBの寄贈によるカタクリの株が植栽されました。カタクリは林床に光が届く早春のうちに葉を展開して花を咲かせ、栄養を蓄えます。そして木の葉が茂り、林床が日陰になると姿を消す、スプリング・エフェメラル(春のはかない短命の植物)です。また種子は発芽しても花をつけるまで10年ほどかかるので、ひとたび生息地が破壊されると再生は非常に困難です。

緑陰の池

## ひょうたん池周辺



みごろ



植物と動物

カモ シラカバ  
フェニックス  
クスノキ スダジイ  
サワラ アカマツ  
カンツバキ  
ノダフジ コナラ  
シラカシ サクラ  
サルスベリ  
ユリノキ  
クスノキ

磯野研究館前の池はひょうたん池と呼ばれています。シーズンには40羽近くの野生のカモ類が集まり、キャンパスの3つの池の中では一番野趣に富んでいます。池の周辺は記念植樹も多く、池の北側に小宮山喜之助氏寄贈のフェニックスが植栽され、池の南側では、真壁喜三郎氏寄贈のシラカバが植栽されておりました。ただ、国立は、フェニックスには寒すぎ、シラカバには暖かすぎたようです。真壁氏寄贈の東側のクスノキは元気です。

また、スダジイ、サワラ、カンツバキ、アカマツ、藤棚(ノダフジ)、シラカシ、コナラ、サルスベリ、ユリノキ、サクラ、クスノキなどなど、高木が豊富で鬱蒼とした静けさがあることが、この池がカモ類に好まれている理由だといえるでしょう。植樹会の活動で池の周囲の枝が整理され、上空から水面が見えるようになったと同時に、カモが飛来するようになった話は有名です。写真中央が池の端を歩くマガモの群れです。

赤松街道

15

## グランド境界の縦列松



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

アカマツ

陸上競技場と硬式野球場を分ける位置に、100m近く縦列に並んだアカマツがあります。一般に、海岸はクロマツ、内陸はアカマツと言われています。国立キャンパスもその例にもれず、殆どがアカマツです。

戦後から続く数十年は、マツには受難の時代でした。経済発展と共に自動車排気ガスが増え、松は排気ガスに弱いことがわかりました。また、松くい虫も日本中に広がりました。キャンパスのマツも、かなり枯れたようです。そのような受難の時代を生き抜いた20本以上のマツが、キャンパスの陸上競技場と野球場の境界として縦に並んでいます。そのタフさは、見習うべきではないでしょうか。



政宗公の憧れ

## 第二スキのゾーンの白萩 16



みごろ

夏  
秋

植物

オミナエシ(女郎花)  
スキ(尾花)  
キキョウ(桔梗)  
ナデシコ(撫子)  
フジバカマ(藤袴)  
ハギ(萩)

第一スキのゾーンが西日本の秋の七草を集めたのに対し、第二ゾーンは東日本の遺伝子を持った秋の七草を集めています。2010年10月に名古屋でCOP10(生物多様性条約締結国際会議)が開催されました。第二ゾーンは、遺伝子の多様性を表現したゾーンになっています。すなわち、生物は同じ種でも地域や状況により違った遺伝子を持ちます。その例として萩の花は一般には蝶形花で紅紫色ですが、関東には白色の花をつける変種の萩があります。第二ゾーンのハギは、その白いハギです。

昔、伊達政宗が、五日市の大悲願寺に咲いている白い萩を見て、譲って欲しいという手紙をお寺に出したという故事があり、この手紙は現存していて東京都の有形文化財になっています。

## サトザクラの園

17

### 植樹会記念植樹コーナー



みごろ

春

植物

サトザクラ(フゲンソウ)  
サトザクラ(ギヨイコウ)  
カンツバキ  
ウバメガシ

西キャンパスの南西角にあたる如意団と山岳部の部室の周辺には、サトザクラを中心に植樹会の記念植樹が行なわれています。サトザクラは野生種に対応して、突然変異や人工交配によってできたものを、人間が守り育ててきた品種です。植樹会では、2007年3月にサトザクラ(フゲンゾウ)3本とカンツバキ5本、2008年3月にサトザ克拉(フゲンゾウ)3本とウバメガシ3本、2010年にサトザ克拉(ギヨイコウ)1本を植樹しました。

サクラはバラ科で、花びら5枚が基本ですが、フゲンゾウ、ギヨイコウとも八重咲で絢爛たるサクラです。このエリアの北側に続く岸田ロードには、野生種のヤマザクラの並木があります。春弥生から皐月の時期に、このコーナー付近は、非常に豪華で贅沢な散策コースになります。

## 白い巨人

### 辛夷の巨木

18



みごろ

春

植物  
コブシ

キャンパスの南西隅にあたる山岳部部室横にあるコブシは、2本の幹からなる株立ち状で、それぞれ幹回りが2mあり、合わせて4mの大木です。関東でも指折りの巨木と推測されます。コブシの名の由来は、いくつもの実がくっついて集合果となり、その形が指を握りしめた拳に似ていることからついたもので、春早く咲いて目立つことから、北海道、東北、信州では「満作」あるいは「田打ち桜」とも呼ばれ、花がよく咲いた年は豊作が期待されました。コブシの花の特徴は、花の下に葉が付いていることで、同科のモクレンなどには見られない特徴です。果実は、秋に熟すと袋果が裂けて、赤い種子が白い糸でつり下がります。

岸田ロード

19

## 野球グラウンド奥の桜並木



みごろ

春

植物

ヤマザクラ

硬式野球場のフェンス沿いに整備されたヤマザクラの並木があります。植樹会の改革に努められ、在任中に逝去された一橋植樹会第5代会長岸田登氏を記念して「岸田ロード」と名づけられ、ススキのゾーンと共に、植樹会の象徴となっています。

古くは、サクラというとヤマザクラを指しました。寿命が長く、巨木も多く、紅葉も美しいものです。吉野山の桜も山桜ですし、岡山県津山市には樹齢560年のヤマザクラがあるとのことです。

花はソメイヨシノよりやや遅く、葉の展開とほぼ同時に開花します。樹皮は、横に皮目があり、よく皮細工に使われます。

カントリーロードの門

## 国際交流会館南側の檜

20



国際交流会館の南側、クロスカントリーの練習路に、あたかも門を形づくるように2本のヒノキが聳えています。

一般に日本の針葉樹では、マツ、スギ、ヒノキが有名です。キャンパスの中では、アカマツは普通に見られますか、スギは無いようです。ヒノキは学内にそう多くはありませんが、太さはこのヒノキが学内一です。

ヒノキは、昔から建築用材として重視されました。特に、江戸時代には、築城、武家屋敷の建築、造船などの資材確保のため木曽谷の森林伐採が急速に進み、森林資源が急速に失われたことから、尾張藩は1665年に留山(とめやま)・巣山(すやま)の立入禁止林や伐採禁止林を設け、藩以外の伐採を厳しく制限しました。「木一本首一つ、枝一本腕ひとつ」と言う厳しい規制です。

ヒノキとサワラは幹の肌合いも、葉も似通っていますが、葉裏の白い気穴の形で見分けることが出来ます。Y字形がヒノキ、X字形のものがサワラです。

みごろ

春

植物

ヒノキ

夏

秋

冬

哲学の道



## 武藏野の雑木林



みごろ



植物

クヌギ  
カタクリ

岸田ロードからひょうたん池にかけては、柔らかな光と周辺の静けさとがあいまって、散策にも、思索に耽るにも絶好の一帯です。この雑木林の中の小路は、その昔大学で哲学の教鞭をとられた太田可夫教授がよく歩いた道であると言われています。

ここにはクヌギが生えています。クヌギはブナ科コナラ亜属で、殻斗がモジャモジャのヒゲ状をしたドングリをつけます。コナラの同心円状の殻斗と比べてみましょう。

また、近年この一角にOBの寄贈によるカタクリの株が植栽されました。カタクリは林床に光が届く早春のうちに葉を展開して花を咲かせ、栄養を蓄えます。そして木の葉が茂り、林床が日陰になると姿を消す、スプリング・エフェメラル(春のはかない短命の植物)です。また種子は発芽しても花をつけるまで10年ほどかかるので、ひとたび生息地が破壊されると再生は非常に困難です。

緑陰の池

## ひょうたん池周辺



みごろ



植物と動物

カモ シラカバ  
フェニックス  
クスノキ スダジイ  
サワラ アカマツ  
カンツバキ  
ノダフジ コナラ  
シラカシ サクラ  
サルスベリ  
ユリノキ  
クスノキ

磯野研究館前の池はひょうたん池と呼ばれています。シーズンには40羽近くの野生のカモ類が集まり、キャンパスの3つの池の中では一番野趣に富んでいます。池の周辺は記念植樹も多く、池の北側に小宮山喜之助氏寄贈のフェニックスが植栽され、池の南側では、真壁喜三郎氏寄贈のシラカバが植栽されておりました。ただ、国立は、フェニックスには寒すぎ、シラカバには暖かすぎたようです。真壁氏寄贈の東側のクスノキは元気です。

また、スダジイ、サワラ、カンツバキ、アカマツ、藤棚(ノダフジ)、シラカシ、コナラ、サルスベリ、ユリノキ、サクラ、クスノキなどなど、高木が豊富で鬱蒼とした静けさがあることが、この池がカモ類に好まれている理由だといえるでしょう。植樹会の活動で池の周囲の枝が整理され、上空から水面が見えるようになったと同時に、カモが飛来するようになった話は有名です。写真中央が池の端を歩くマガモの群れです。

独歩の郷

## 23 経済研究所西側・北側



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

コナラ  
アカマツ  
サクラ  
ケヤキ  
イロハカエデ  
ウメ  
ゴヨウマツ

常磐の園

## 24 矢野二郎銅像周辺



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

ドウダンツツジ  
アカマツ  
クロマツ

武藏野とは東京23区西部と多摩地域北東部、埼玉県入間郡にまたがる洪積台地の略称ですが、経済研究所の西側と北側はその武藏野の雑木林の面影を残す一帶です。武藏野の雑木林の主要樹木は、コナラとクヌギですが、ここでは、コナラの9本を中心に、アカマツ、サクラ、ケヤキ、イロハカエデなどがあります。コナラはいずれも大木ですが、萌芽更新の形跡を示す木が3本あります。コナラやクヌギはかつて薪や炭などで利用されました。20年生位の若いコナラやクヌギは、伐採しても切り株からまた新しい芽が出て成長します。これが萌芽更新で、順序と広さを充分にわきまえて伐採していくけば、常に成長する雑木林を維持できることになります。コナラはブナ科で、ドングリの殻斗はウロコ状です。

なお、経済研究所南側のウメは石川善次郎氏寄贈樹木で、玄関手前のゴヨウマツは応援部創部25周年の記念植樹です。

兼松講堂西側のやや奥まった位置に、矢野二郎初代商法講習所長の全身立像があります。銅像は半径10m程の円形敷地の中央台座上にあり、像を囲む主植物は50本を超えるドウダンツツジと像に寄り添うアカマツです。

ドウダンツツジは、初夏に緑の葉を背景に白い花がスズナリにぶら下がります。緑の葉を夜空に、白い花を星に例えて漢字では満点星と書きます。

立像の前面(南側)には像を先導するようにしてアカマツがそびえます。日本人は、青々とした緑を保つマツを常磐木として愛で、節操や長寿を象徴する木としてきました。このマツも本学の永遠の栄光と繁栄を見守るかのようです。

銅像への入口に昭和11年卒OB植樹のクロマツがあります。

## 生きた化石



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

メタセコイア  
イチョウ

## 図書館前主庭園



兼松講堂西側にメタセコイアとイチョウの大木があります。これらの種は恐竜が栄えた1億年前の白亜期に生きていたことが知られています。恐竜が化石でしか見られなくなった現在でも普通に見られ、特にイチョウは多くの人に親しまれています。

メタセコイアは、大阪市大の三木茂博士が化石を研究し、過去に存在していた樹木だということを、戦前の1941年に発表しています。終戦翌年の1946年に中国四川省の奥地で生きていたメタセコイアが発見され、米国は苗を日本に贈ってくれました。それが日本中に広まり、今は成長して各地で巨大な姿を見せています。秋の紅葉が共に綺麗です。イチョウは黄色に、メタセコイアは褐色・ブラウンになります。

正面奥にロマネスク建築の図書館があり、その前に池、キャンパスの顔といえる地域です。学生、市民などにも親しまれ、OBの記憶にも残っている地域で記念植樹が目立ちます。図書館入口には、武藏野深きアカマツがそびえています。その手前の池の奥、南にモチノキ、北にモッコクがあり、濃い緑を形づくります。池の北側には3本の記念植樹があります。西から順にニューヨーク支部寄贈のキンモクセイ(大学創立100周年記念)、昭和11年卒OBのモッコク(同35周年記念)、昭和18年卒OBのシラウメ(卒業25周年記念)です。池の南側のハナミズキは井の頭支部創立50周年記念植樹です。

図書館と対極をなす庭園の東側では、佐野善作像の北側にアカマツの巨木とマテバシイが3本ずつ並び、像の南のカンツバキは大正6年卒OBの記念植樹です。このエリアは、早春にシラウメが香って可憐な花を咲かせ、春の盛りはオオムラサキとドウダンツツジが咲き誇ります。秋はキンモクセイが香り、いつでも、誰もが楽しめる庭園です。

みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

アカマツ  
モチノキ  
モッコク  
キンモクセイ  
ハナミズキ  
マテバシイ  
カンツバキ  
シラウメ  
オオムラサキ  
ドウダンツツジ

## 北防音林

## 西校舎東北角防音林



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

マツ  
ヒマラヤスギ  
ネズミモチ  
シュロ  
アオキ  
イタヤカエデ  
ササ

国立駅から大学に向かって最初に目に入る森です。このエリアは、高木の常緑針葉樹であるマツとヒマラヤスギを主木として、下層部分はネズミモチ、シュロ、アオキなどの常緑の低木とイタヤカエデなどが密生し、林床はササが覆っています。主木と低木が壁になって、外部の騒音がキャンパスへ侵入するのを防いでいます。

樹木を遮音に利用するには、①樹高が高く、直徑が太い木が多くあること、②大きな木の下が低木や草で覆われていること、③常緑であることなどが求められます。緑地基本計画では、現状のまま手を入れずに保存するエリアに指定されています。



## 東庭園

## 東校舎の丸池周辺



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

ドウダンツツジ  
ウメ  
サルスベリ  
イロハカエデ  
メタセコイア  
モチノキ  
アカマツ  
タギヨウショウ

東キャンパスに入ってまず目に入る丸池は、池と、10株のドウダンツツジで囲まれた庭園です。ここも四季を通じて楽しめる工夫がされています。春は、紅白のウメの花です。また、周囲のドウダンツツジの新緑と白色の花も楽しめます。夏は、北側・東本館正面の3本のサルスベリが長い期間花をつけます。秋には、南西側のイロハカエデと周囲のドウダンツツジの赤と東側のメタセコイアの赤褐色・ブラウンが目を引きます。常緑は南側に昭和18年専養会植樹のモチノキと、北西側の2本のアカマツ、南東側の4本のタギヨウショウ(多行松)です。タギヨウショウは、アカマツの園芸品種です。丈はあまり高くなりませんが、株立ち風になり面白い形態が愛でられています。池にはハスがあります。この庭園は外側から鑑賞するのが良いようです。

28

法学の守護神

29

## マーキュリータワー西側



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

シラカシ  
サワラ

鈴の鳴る森

## 鈴懸の木(荒ゼミ記念植樹)

30



みごろ

春 夏  
秋 冬

植物

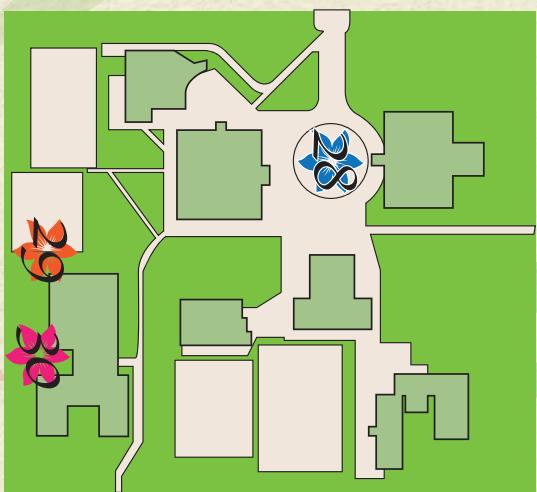
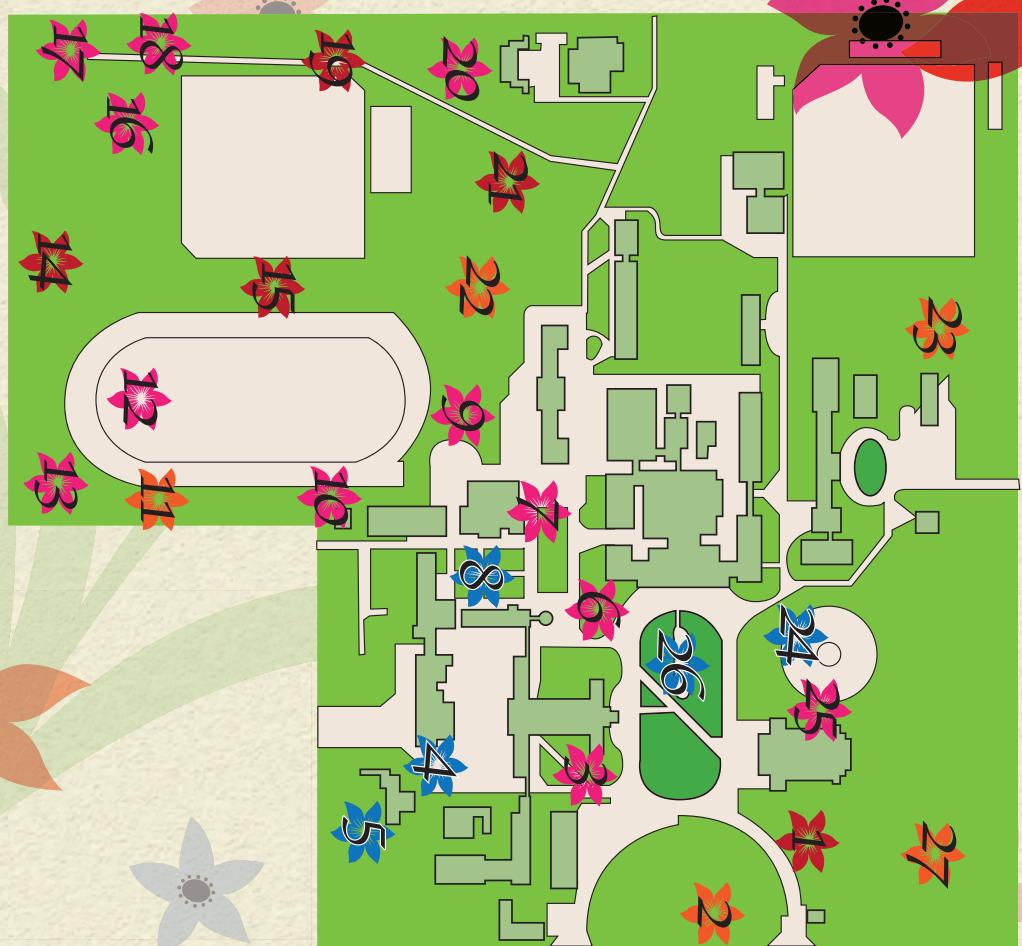
アメリカスズカケノキ

東校舎のマーキュリータワーとテニスコートの間に、シラカシとサワラの巨木が南北に縦列しています。ともに常緑の高木ですので、教室からは目に優しい緑を演出する一方で、テニス部員の激しい汗をまろやかにし、大学通りの騒音を防ぐ遮音の効果も大きいと思われます。シラカシはブナ科の常緑広葉樹ですが、用途はカンナの台や金槌の柄などの器具材、建築材、椎茸の原木などです。また、サワラはヒノキ科ヒノキ属の常緑針葉樹で、ヒノキそっくりです。材に芳香がないので、ヒノキより一段低く見られています。しかし、水に強く、価格も安いので、桶や船材など、生活実用面によく利用されました。



東キャンパスのマーキュリータワー南側に、荒ゼミ記念植樹のスズカケノキがあります。スズカケノキと呼ばれる木は、①スズカケノキ(欧洲・小アジア原産)と②アメリカスズカケノキ(北米原産)、③モミジバスズカケノキ(①と②の交雑種)の3種類です。この3種をまとめてプラタナスと呼んでいます。国立キャンパスにあるのはすべてアメリカスズカケノキですが、ここには、3本並んで植栽されています。西プラザ前のアメリカスズカケノキや、後方にあるイチョウの木に比べると現在は少し見劣りする感がありますが、普通に育てば20mを超える巨木になる木ですから、数十年後にはキャンパスの中でもひときわ目を引く場所になるはずです。

# Campus Map



2011年9月初版発行  
編集:一橋植樹会 Green10 Project Team